

ハマグリ *Meretrix lusoria* (Röding)

【選定理由】

本種は分布全域で著しい減少が報告されており、1990年代には瀬戸内海、有明海のごく一部や天草などに健全な生息場所が残されていたが、その他では非常に稀な種となってしまった(和田・他, 1996)。県内でも本種は1960年代には三河湾奥部の前芝付近、福江湾で多産し、食用にされていた(愛知県科学教育センター, 1967)が、1980年代には著しく生息地と個体数が減少し、2000年頃までは、死殻確認例も少ない状況であった。その後、蒲郡市三谷地先人工干潟(木村, 2004, 2005)で生貝が採集され、2010年代からは県内内湾域で潮干狩りの対象とされるほどに個体数が増加した。現在も潮通しの良い内湾河口域を中心に回復傾向は継続している。干潟(潮間帯)でも小型個体に加えて、大型個体も確認できるようになった。前回(VU)よりランクダウンするべき種と評価された。



上段2個体：蒲郡市三谷地先人工干潟, 2005年7月21日,
下段：南知多町河和北側干潟, 2017年6月23日, 木村昭一採集

【形態】

殻長10 cmに達する大型種。殻は丸みを帯びた三角形で、殻はよく膨れるが殻質は薄い。殻の色彩は濃い褐色から灰褐色まで個体変異が多く、模様も変異する。チョウセンハマグリは殻が厚く、腹縁は直線的で、本種とは別種である。県内では渥美半島外洋側の浅海砂地に生息している。また市場で見られるシナハマグリ(中国、韓国からの輸入ハマグリ類)は殻全体に丸みが強く、殻の模様は褐色の稲妻模様のある個体が大部分で、色彩の変異も少ない。

【分布の概要】

【県内の分布】

生息地と個体数が著しく減少していたが、近年回復傾向が認められており、愛知県レッドリスト2002, 2009, 2015, 2020ではランクもCR→CR→VU→NTと評価されている。しかし、依然として1960年代の生息状況にまでは回復していない。

【世界及び国内の分布】

日本と韓国南部に分布し、日本では、陸奥湾～九州まで分布する(山下, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したように、県内の干潟から潮下帯は有機汚泥の堆積、無酸素層の発生などで環境が著しく悪化し、1960年代に多産し食用にされていた本種の生息場所、個体数は著しく減少した。現在底質改善が進んだ海域を中心に回復傾向が確認されている。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

水産庁・水産資源保護協会(1994)では減少にランクされ、葉山しおさい博物館(2001)では相模湾の個体群が消滅にランクされている。

【引用文献】

- 愛知県科学教育センター, 1967. 愛知の動物. 222pp.
葉山しおさい博物館, 2001. 相模湾レッドデータ 貝類, 104pp.
水産庁・水産資源保護協会, 1994. 軟体動物. 日本の希少な野生水産生物に関する基礎資料(Ⅰ), 123pp.
木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18-20.
木村昭一, 2004. 蒲郡市三谷町人工干潟の貝類相. かきつばた, (30): 14-20.
木村昭一, 2005. 蒲郡市三谷町人工干潟の貝類相 続報. かきつばた, (31): 29-31.
和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.
山下博由, 2012. ハマグリ, p. 150. in: 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.

(木村昭一)